

2021年1月21日

日本弁護士連合会 人権擁護委員会 御中

## 「テクノロジー犯罪」と「嫌がらせ犯罪」による 人権侵害に対する救済申立て

### 1. 申立人

特定非営利活動法人テクノロジー犯罪被害ネットワーク

理事長 石橋輝勝 (2021年1月21日現在会員数442名)

〒102-0072 東京都千代田区飯田橋二丁目9番6号 東西館ビル本館47号室

電話&FAX 03-5212-4611

### 2. 「テクノロジー犯罪」と「嫌がらせ犯罪」で人権侵害をしている犯罪主体

犯罪主体1. テクノロジー・嫌がらせ両犯罪では、レーダー、人工衛星、スーパーコンピュータ、AI技術などを使った監視技術(サバイランス・テクノロジー)が基礎的技術として使われております。今日の監視技術は24時間365日対象人物を追跡監視することができます。このような技術を掌握して使用できるのは軍、情報機関、警察を含めた治安組織と考えられます。また米国とイスラエルにあるスーパーコンピュータを使うと同時に数百万人を監視できるとのことから、在日米軍や外国からの監視も考えられます。諜報活動の世界では、レーダー・無料のコンピュータプログラム・人工衛星・基地局を使った終日監視が20年前には一般的に行なわれるようになっていたとの証言から、各国諜報機関が日本で行なっている可能性もあります。

犯罪主体2. テクノロジー犯罪では、思考を含めて人間のあらゆる機能を遠隔からコントロールするサイバネティクス技術が使われております。これが前記サバイランス・テクノロジーと一体となって一般市民を攻撃しているのです。当該技術を掌握して使用できる立場にあるのも軍、情報機関、警察を含めた治安組織であります。また人工衛星を利用するので在日米軍や外国からのサイバネティクス攻撃も考えられます。

犯罪主体3. テクノロジー犯罪では、サイバネティクス技術の一態様としてある神経学的通

信システム（音声・映像送信）が使われております。当該技術を使用できるのも軍、情報機関、警察を含めた治安組織と考えられます。これにも人工衛星が利用されているのですから在日米軍や外国からの音声・映像送信攻撃も考えられます。

犯罪主体4．テクノロジー犯罪では、監視技術（サベイランス・テクノロジー）、マイクロ波兵器、サイバネティクス技術等を用いて、拷問、疾病誘発、殺人が行なわれております。当該技術を使用できるのも軍、情報機関、警察を含めた治安組織と考えられます。またこれにも人工衛星が使われているのですから在日米軍や外国からの攻撃も考えられます。

犯罪主体5．テクノロジー犯罪で用いられているサイバネティクス技術には、それを確実ならしめるために、インフォームドコンセントのないブレインチップのインプラントが使われている可能性があります。また人間をコントロールするサイバネティクス技術を完成させるには人体実験が不可欠であります。その人体実験も本人に知らせないことでより貴重な情報が得られます。このような実験を行なえるのも軍、情報機関、警察を含めた治安組織と考えられます。日本は敗戦国ですから米国との連携で人体実験が行なわれていることも考えられます。

犯罪主体6．テクノロジー犯罪で使用されている監視技術（サベイランス・テクノロジー）とサイバネティクス技術を用いて、国民の出生から死までの監視と管理が始まっております。前記ブレインチップを用いれば国民絶対管理の専制国家を招来することができます。当該行為ができるのも軍、情報機関、警察を含めた治安組織と考えられます。また敗戦国ですから米国との連携で行なわれていることも考えられます。

犯罪主体7．テクノロジー犯罪における地球物理学兵器や気象変動兵器の使用でおびたしい数の人に危害を加えることができます。当該兵器で、洪水、干ばつ、地震、津波、台風、竜巻、森林火災、熱波、集中豪雨を引き起こすことができるといわれておりますことから、これは国家・国民に対するテロ行為そのものであります。当該兵器を使用できるのも軍、情報機関、警察を含めた治安組織と考えられます。また当該兵器を所有している国からの攻撃も考えられます。各国の軍、情報機関、警察を含めた治安組織の連携で進められていることも考えられます。

犯罪主体8．テクノロジー犯罪と嫌がらせ犯罪を目的達成の手段として利用して高度情報化時代の戦争が進められております。その結果として両犯罪を用いた絶対専制国家を招来する危険性があります。このようなことができるのも、軍、情報機関、警察を含めた治安組織と考えられます。また各国の軍、情報機関、警察を含めた治安組織の連携で進められていることも考えられます。

犯罪主体9．嫌がらせ犯罪（組織的・継続的嫌がらせ行為）は不特定多数により24時間3

65日継続して行なわれる様々な嫌がらせ行為であります。嫌がらせ犯罪も世界的規模で行なわれており、元FBI特別捜査官テッド・ガンダーソン氏は、その実行組織を「政府系悪徳犯罪集団」と称して、1980年代初めにはFBIやCIAなどが隠密裏に行っていたプログラムであると証言しております。日本は敗戦国ですから米国の影響を受けて、日本にも同様の政府系悪徳犯罪集団が組織化されていると考えます。特に軍、情報機関、警察を含めた治安組織には徹底されていると考えます。その組織がさらにヤクザ組織や新興宗教団体などを傘下に収めて、国内くまなく網の目のように組織して行なっていることが考えられます。日本版政府系悪徳犯罪集団が、民主的政治プロセスに影響を及ぼし、政権掌握に利用され、結果として傀儡政権作りに利用されていると考えられます。そしてこれも世界的傾向と考えられます。

犯罪主体10. テクノロジー・嫌がらせ両犯罪主体は、両犯罪を用いて、凶悪犯罪・事件の増加、自殺者の増加、精神疾患患者の増加、家族破壊、社会破壊、社会の低俗化、警察の悪質化など、世相を演出しております。かかる行為ができるのも、米国の政府系悪徳犯罪集団と連携した軍、情報機関、警察を含めた治安組織が背景になければできないことであります。日本における政府系悪徳犯罪集団を理解するには石橋輝勝個人宛て書簡が利用できると思われま。

### 3. テクノロジー犯罪と嫌がらせ犯罪による人権侵害概要

軍事技術に先導された科学技術は、特に情報収集技術において飛躍的發展を遂げ、高度情報化時代の礎を築いてきている。情報収集として、各国指導者の動向を、人工衛星を使って監視することから、室内でも動向が探れ、発言を盗聴でき、その考えていることを読み、そして自由に動かせれば最高の情報収集技術となるわけで、先進各国が守秘義務の中で開発を続けているものである。これにはレーダーや人工衛星を用いての情報収集とスーパーコンピュータやAIを使っての解析があり、その精度とスピードは飛躍的に増しております。しかもその対象は拡大でき、米国とイスラエルにあるスーパーコンピュータを使うと同時に数百万人を監視できると言われ、全人類を対象にすることも可能になっていることが想像されます。監視に加えて、人の思考を読み、自由に動かすためにサイバネティクス技術が開発され、70年を越える開発の結果、その完成度はテクノロジー犯罪被害者が証言しているところがあります。当該被害者が、三欲操作、生理操作、五感操作、感情操作、疾病操作、筋肉や運動機能の操作、そして思考操作まで証言していることから、人間のあらゆる機能が遠隔からコントロールできるレベルに達していると考えられます（添付資料1）。これはこれまでにない人権侵害が可能になっていることを示すものであります。また人間に止まらず、他の生物や地球環境、気象までコントロールする技術も開発され使用されていることが考えられます。人間・他の生物・地球環境・気象まで悪意を持ってコントロールしようとするテクノロジー犯罪は許されるべきものではありません。このテクノロジー犯罪については、昨年2月、国連人権委員会第43回理事会で、拷問問題等報告者ニルス・メルツァー氏により精神的拷

問として問題提起されました（添付資料2）。

また嫌がらせ犯罪の蔓延も著しく、全国的・世界的な組織網を完成し、連絡網を完備して、マニュアルに従って行なっていることが考えられます。この組織はテクノロジー犯罪で使われている武器の一部（レーダー・音響兵器・マイクロ波兵器）を使って、世相を演出するだけでなく、傀儡政権を作るために働いていると考えられます。音響兵器やマイクロ波兵器については、在キューバ米国大使館員に生じた現象がこれによることが報道されて一般もその存在を知るところとなっております。

以上の実態を看破できましたことから両犯罪は被害者の問題を越えて国民的問題であります。いつでも全ての国民にこれを行なえる準備が整っていると考えます。これを放置しますとテクノロジー・嫌がらせ両犯罪主体による人類絶対管理の専制時代が到来する恐れがありますことから、人類史上かつてない岐路に立っていることをご理解の上、それを阻止するために、以下の人権侵害状況に、日本弁護士連合会としてできる最大限の対応をお願い致します。

## 「テクノロジー犯罪」と「嫌がらせ犯罪」による人権侵害概要詳細説明

### 犯罪主体1に関する詳細説明

テクノロジー犯罪には、遠距離から、見えない方法で、特定個人を四六時中つきまとう監視技術（サバイランス・テクノロジー）が使われております。これはテクノロジーが特定個人をストーカーする時代になっているということであり、半世紀にわたる歴史があると考えられます。

これについて、元フィンランドラップランド地方最高医務責任者で、テクノロジー・嫌がらせ両犯罪の世界的研究者ラウニ・キルデ博士は、米国とイスラエルにあるスーパーコンピュータを用いれば同時に数百万の人間を監視できると証言しております（添付資料3）。これは国境を越えて監視できることを示唆するものであります。そしてこれがテクノロジー犯罪と嫌がらせ犯罪を行なうために最も基本的な技術となっているのです。

また米国のCIAやイスラエルのモサドで諜報部員として活動したカール・クラーク氏は、「ターゲットはレーダー、衛星、基地局、無料のコンピュータープログラムで、どこに居ても追跡できます。ターゲットの近くに3台のレーダー装置が配置されることもありました。このレーダーからマイクロ波が発信され、その一部がターゲットを捕捉し、結果が評価されます。特殊部門に所属していた私の同僚は、コンピューターでターゲットを終日追跡することができました（添付資料4）」と証言しております。このような活動が諜報部員の仕事としてあり、20年前にはその世界では一般的になっていたという氏の証言は重要であります。

このように高度な監視と追跡を行なう技術がテクノロジー犯罪の最も基本的な技術となっております。両者の証言から軍事レベルのものから諜報部員の使用に供するように持ち運びできるものまでであることが分かってまいりましたが、これが国民に悪意を持って使われていることから、これまでにないプライバシーの侵害であり人権侵害であります。

以上のことから、2019年2月23日付、日本弁護士連合会会長宛て『テクノロジー犯罪と嫌がらせ犯罪を撲滅するための要望書（添付資料19）』、要望事項1で、「レーダー、人工衛星、スーパーコンピュータ、AI技術などを用いた監視技術（サバイランス・テクノロジー）の存在及びその使用実態を、日本弁護士連合会所属全弁護士がご理解の上、その技術が特定秘密保護法で守秘義務の対象とされないよう政府を監視し続けて頂きますとともに、その悪用から国民を守るために、法を整備するだけでなく、世界的傾向でもあることから、世界の法律関係者が結束してこれに当たるようにして下さい」と要望しているところであります。

## 犯罪主体2に関する詳細説明

テクノロジー犯罪には、遠距離から、見えない方法で、人間の生理機能、運動機能、五感、感情、三欲に影響を及ぼすテクノロジーが使われております。しかもそれは影響のレベルを越えてコントロールできるレベルにあることは被害者証言から断言できることであります。それを可能にしている技術がサイバネティクス技術であります（添付資料5）。そしてその完成度をテクノロジー犯罪被害者が証言しているのです。この事実は、本人以外の意思で自らの各機能が動かされてしまうということで、言語を絶する人権侵害であります。このような技術が国民に悪意を持って使われていることから、これまでにない人権侵害が行なわれているのです。

テクノロジー犯罪には、遠距離から、見えない方法で人間の思惟活動に影響を及ぼすテクノロジーが使われております。これは今日の技術が人間の最大特徴である脳活動に介入できりうようになったということで、究極のプライバシーの侵害であり、人権侵害であります。これも前記サイバネティクス技術の為せる業であります。これに付いては欧米でよく言われるマインドコントロール（洗脳）技術という表現もできます。被害内容としては、考えていることが読まれている（思考盗聴）、作られた思考やアイデアが脳内に送られてくる、猜疑心を掻き立てるように脳活動が活発化される、思考できなくされる、寝ているとき脳に介入され利用される、考えを読んで嫌がらせ犯罪に利用されている、意識を失くされ動かされる等であります。一方考えを読んでいることを分からせるように仕掛けてくることもあります。思考は人間の究極のプライバシーですからそれが読まれているということはたまたま嫌なものであります。このような技術が存在して無辜の一般市民に悪用されているということは本当に恐ろしいことであります。この技術は感知できないように利用することも恐ろしいことであります。知らないうちに何者かに動かされていたということがあり得ることに

なるのです。私の経験から脳への介入は50年にわたる歴史があると考えますので、それほど長きにわたりこれが使われていたということは、犯罪主体が歴史を演出している可能性があります。この技術の存在を裏付ける資料として、1998年1月、フランス国家生命倫理委員会の見解があります（『神経科学の進展と人権への脅威』（添付資料6））。——同委員会でパストゥール協会の精神科学者 Jean-Pierre Changeux 博士は「人間の脳の働きを理解することは将来の最も野心的で豊かな教養の一つになる」とした上で、「神経科学は脳内の映像技術の進展によって計り知れないプライバシーの侵害を作る」とその潜在的危険を提起し、「その装置は今でこそ高度な技術を要するけれども、それがやがて一般的になり、身近で使用されるようになることを予見して、それは個人の自由の侵害、行動のコントロール、洗脳という虐待に道を開くものである」——と述べたのであります。当NPOの訴えはその危惧が現実のものとなっていることを証明するものであります。またフランス原子力委員会の Denis LeBihan 博士は「映像技術の使用は人々の思考を読むことができるまでに至っている」と述べております。そして「同委員会はその危険を深刻に捉えて、その問題を研究し、可能な注意を喚起する」と表明しております。テクノロジーのレベルは今ここにあり、それが実際に悪用されていることを当NPOは訴えておりますことをご理解頂きたいと思っております。

以上のことから、2019年2月23日付、日本弁護士連合会会長宛て『テクノロジー犯罪と嫌がらせ犯罪を撲滅するための要望書（添付資料19）』、要望事項2で、「思考を含めて人間のあらゆる機能を遠隔からコントロールするサイバネティクス技術の存在及びその使用実態を、日本弁護士連合会所属全弁護士がご理解の上、その技術が特定秘密保護法で守秘義務の対象とされないよう政府を監視し続けて頂きますとともに、その悪用から国民を守るために、法を整備するだけでなく、世界的傾向でもあることから、世界の法律関係者が結束してこれに当たるようにして下さい」と要望しているところであります。

### 犯罪主体3に関する詳細説明

テクノロジー犯罪の代表例として音声・映像送信被害があります。周囲にだれもいないのに、また音源がないにもかかわらず、頭の中で音声が聞こえ、周囲に存在しない映像が見えるというものであります。端末を持たなくても会話できるのですから通信の最先端技術の悪用と考えられます。「情報化社会」という言葉を作った増田米二は、同名の著書（1980年刊）で、「現代の通信技術の危険性、また国境を越えて人間の脳をコンピュータにつなぐことが可能になるコンピュータの先端的な利用の危険性について、人々がこのような神経学的な通信システムを学習せずに、その用途への影響力を掌握すれば、新しい種類の専制君主が出現する恐れがある『束縛：肉体から精神、心、神経生物学的領域へ（SAVAGES, SCIENCE and Brain-Computer Technology）』 p1（添付資料7）」と40年前に警告しております。学者はいい加減な論拠から発言しないもので、しかも40年前から音声送信被害者が存在することからも、神経学的通信システムの基礎はその時点に出来あがっていたものと思われまます。また元英国海軍所属マイクロ波の専門家バリー・トゥロー氏は「政府はマイクロ波をモールス信号の

ようにパルス周波数を変化させることによって脳にはいりこみ、また脳とつなぐことによって誘発できるものを発見しました。パルス周波数を特別化して精神科医が生来の精神的病なのか誘発された精神病なのか分からないレベルに精神病を誘発できます。論理的にできることは個人の脳をターゲットにできることです。マイクロ波では非常に常識的なことですが、聞くことができる音声幻覚に陥らすことができます。あるいは精神分裂病の兆候を示すこともできます（添付資料8）」と述べて音声送信技術の存在を証言しております。このような人権侵害が40年以上にわたり行なわれているのです。

以上のことから、2019年2月23日付、日本弁護士連合会会長宛て『テクノロジー犯罪と嫌がらせ犯罪を撲滅するための要望書（添付資料19）』、要望事項3で、「サイバネティクス技術の一態様としてある神経学的通信システム（音声・映像送信）の存在及びその使用実態を、日本弁護士連合会所属全弁護士がご理解の上、その技術が特定秘密保護法で守秘義務の対象とされないよう政府を監視し続けて頂きますとともに、その悪用から国民を守るために、法を整備するだけでなく、世界的傾向でもあることから、世界の法律関係者が結束してこれに当たるようにして下さい」と要望しているところであります。

#### 犯罪主体4に関する詳細説明

テクノロジー犯罪には、遠距離から、見えない方法で身体の各部位をピンポイントで攻撃できるテクノロジーが使われております。具体的には、針で刺された痛み、電気が体を突き抜ける痛み、各臓器をピンポイントで撃たれる痛み、陰部攻撃、レーザーのようなもので狙い撃ちされる痛みと、攻撃方法は様々であります。さらには大小の空気の弾が当たることによる衝撃痛、頬を針金で貫かれる感覚や神経を編まれる感覚挿入のようにバーチャル的感覚挿入による攻撃痛の報告もあります。これら痛み攻撃が可能であることを証明する資料としてアラン・フレイの論文『変調された電磁波エネルギーに対する人間聴覚システムの反応（添付資料9）』があります。それには「条件設定の異なる発信機では、頭を強く打たれる感覚——条件設定を変化させるとピンや針で刺された感覚が生じた」とあり、被害者に生じている痛み攻撃の一部がマイクロ波パルスを用いたテクノロジー犯罪としてあることに確信をもたせる内容であります。また、前出バリー・トゥロー氏は、『マイクロウェーブ技術の危険性』で、「我々には8300の文書があります。私はその内の2300の知識を持っています。——技術的にできることは、——脳以外の体の他の部分も攻撃できます。心臓を攻撃して心臓発作を引き起こせますし、肺を攻撃して出血させることができます。またホルモンシステムを制御している体の重要な腺のいくつかを攻撃できます」と述べております。このようにマイクロ波パルスを用いたマイクロ波兵器で、遠隔から特定部位にピンポイントで痛みを生じさせることができ、疾病を誘発させることができるのです。

テクノロジー犯罪にある生理操作には異常な尿意・便意・ガスの発生があります。犯罪主体1で説明した監視技術（サバイランス・テクノロジー）と一体となって、四六時中の微弱な便意感、ガス充満状態、失禁操作が可能になります。これが長期にわたってあるいは一生

付いて回るのでから拷問以外の何物でもありません。また、嘔吐・咳・下痢・発熱等風邪症状、極度の二日酔いや乗り物酔い、食当たり、切り傷、やけど、かゆみ症状などの疑似疾病の演出も可能であります。疑似疾病の典型的な例が、前記声音・映像送信で、それを幻聴・幻覚と捉えて統合失調症と診断することであります。本当の原因はテクノロジーの悪用にあるのですから、問題をなんら解決しないどころか、被害者をさらに追い込む結果になっております。そのような中で、概要説明で記した在キューバ米国大使館員への音響兵器？マイクロ波兵器？による攻撃が明らかになって、当該被害者に外傷がないにもかかわらず脳機能障害が認められたという医師の診断が出されたことは、今後の改善に期待を持たせるものであります（添付資料10）。この疾病を誘発するマイクロ波兵器の存在とそれによって誘発された症状を病気と権威づけている医学会の誤った対応をご理解いただきたく思います。

以上のことから、2019年2月23日付、日本弁護士連合会会長宛て『テクノロジー犯罪と嫌がらせ犯罪を撲滅するための要望書（添付資料19）』、要望事項4で、「監視技術（サバイランス・テクノロジー）とマイクロ波兵器やサイバネティクス技術を用いて国民を拷問し疾病を誘発している実態を、日本弁護士連合会所属全弁護士がご理解の上、その技術が特定秘密保護法で守秘義務の対象とされないよう政府を監視し続けて頂きますとともに、その悪行から国民を守るために、法を整備するだけでなく、世界的傾向でもあることから、世界の法律関係者が結束してこれに当たるようにして下さい」と要望しているところであります。

#### 犯罪主体5に関する詳細説明

サイバネティクス技術を完全なものとするためにインプラントは不可欠なものと考えます。これに関して、前出ラウニ・キルデ博士は、ジョン・グレン元米国上院議員による上院での発言を「1997年ジョン・グレン上院議員は、ブレイン・プロジェクトは現在最も非米国的問題であると述べた。彼は、米国の医薬品はブレイン・チップを含んでおり、それによって人間はスーパーコンピュータと接続され、医療研究、脳実験、行動操作、マインドコントロールが行われていると暴露した（添付資料11）」と紹介しております。そしてこれが正にテクノロジー犯罪の本質であります。

ジョン・グレン元上院議員の暴露から24年が経過しましたが、私が1988年に米国に滞在していた時、TVニュースで若い父親が娘をわきに座らせ、自分の娘には予防接種させないと訴えている姿を紹介しておりました。この父親はブレインチップインプラントを認識していた可能性があります。それから33年が経過しておりますので、米国だけでなく、世界でおびただしい数の人が知らないうちに同チップをインプラントされている可能性があります。このインプラントを阻止しなければテクノロジー犯罪は終わりません。

さらに卑近な例ではありますが、本人に知らせないインプラントを私自身経験しております。私の場合は上の親知らずにいつの間にか金属が装着されておりました。大きく口を開か



なければ治療できない場所ですのでそれなりの設備と技術がなければできないことであります。医療現場を使つての本人の了解なしのインプラントは私に止まらなかつたと思います。このことから日本でも人体実験が行なわれていたと思います。

前出バリー・トゥロー氏は英国での事例を「我々は政府が資金を拠出して国民の意思に反して実験を行なつたことを示す文書を持っています。意思に反してだけでなく、告げることなしに。我々は1976年に遡つて全ての関連情報を所有しています。全てが1976年までに知られていたのです。我々はそれ以上の証明も、調査も、なにも必要なくなつていたのです。そして我国で起草されたニュールベルグ条約、この条約は特別な条約ですべての国が署名しました。この条約が言っていることは、何人も同意なしに実験されない。また同意をする前に、全ての関わり、健康問題、将来の健康問題を理解する法的権利をもち、それを拒絶する法的能力を有する。但し唯一の例外があり、それは医者に限り自らを実験する場合である。それは第5項にあります。ですから何人も人体実験されることは許されないのです」と証言しております。

注射型インプラントの存在についてはラウニ・キルデ博士が「衛星の助けを借りて、インプラントされた人間は地球上のどこにいても追跡される。このマイクロチップ技術は、イラク戦争でテストされたもののひとつであると、カール・サンダース博士は述べた。彼は、注射型のインテリジェンス・マンド・インターフェース (Intelligence-manned Interface) バイオチップを発明した (ベトナム戦争初期、兵士は血中のアドレナリンを増大するランボーチップを注射された) (前出『マイクロチップインプラント、マインドコントロール、サイバネティクス』p2)」と紹介しているところでもあります。

以上のことから、2019年2月23日付、日本弁護士連合会会長宛て『テクノロジー犯罪と嫌がらせ犯罪を撲滅するための要望書 (添付資料19)』、要望事項5で、「サイバネティクス技術に不可欠なブレインチップの国民へのインプラントとインフォームドコンセントがない人体実験の実態を、日本弁護士連合会所属全弁護士がご理解の上、その技術が特定秘密保護法で守秘義務の対象とされないよう政府を監視し続けて頂きますとともに、その悪行から国民を守るために、法を整備するだけでなく、世界的傾向でもあることから、世界の法律関係者が結束してこれに当たるようにして下さい」と要望しているところでもあります。

**\*新型コロナウイルス感染予防対策として開発されているワクチンへのブレインチップの混入を断固として阻止して下さい。**

## 犯罪主体6に関する詳細説明

テクノロジー・嫌がらせ両犯罪が50年を超える歴史があり、対象になった人とそうでな

い人には天地の差が生じますが、既に国民全てに両犯罪を仕掛けられるようになっていることを確信致します。またそれに止まらず出生から死まで両犯罪主体の意思の中で生きざるを得ない体制がかなりの程度完成しているように思われます。国民総背番号制の議論をあざ笑うかのように1970年代初めには特定個人を捉えて離さないサベイランス・テクノロジーが稼働しておりました。出生から成長して、進学、学力の程度、進路、就職、結婚、仕事の功績、出世、収入、貯蓄、死に至るまでの細かい管理もその時代には始まっていたと考えます。これは基本的人権として認められるあらゆる自由が阻害されているということでもあります。この国民絶対管理を司る部署が日本国内に必ず存在するはずであります。そこにいる輩に必要な不可欠なのがテクノロジー・嫌がらせ両犯罪であります。

テクノロジー・嫌がらせ両犯罪の対象とされるか否かで天地の差が生じることはもちろんですが、既に文化・スポーツ分野で大いに使われていると考えます。特にスポーツ分野では金メダルを目指して運動能力を強化するために不可欠になっている可能性があります。これは新しい意味でのドーピングで、プラスに使われるかマイナスで使われるかで決定的差が生じることになります。試合を決定づけられるのですから世界的賭博組織垂涎の技術でもあります。2020年の東京オリンピックを間近にして、競技選手へのテクノロジー犯罪を新たなドーピング問題と認めて、規制の対象とし、選手がテクノロジー犯罪に晒されない環境づくり、同攻撃に即刻対応できる体制を構築しての開催が望まれます。

以上のことから、2019年2月23日付、日本弁護士連合会会長宛て『テクノロジー犯罪と嫌がらせ犯罪を撲滅するための要望書(添付資料19)』、要望事項6で、「監視技術(サベイランス・テクノロジー)とサイバネティクス技術を用いて国民を出生から死まで監視し管理しようとしている実態を、日本弁護士連合会所属全弁護士がご理解の上、その技術が特定秘密保護法で守秘義務の対象とされないよう政府を監視し続けて頂きますとともに、その悪行から国民を守るために、法を整備するだけでなく、世界的傾向でもあることから、世界の法律関係者が結束してこれに当たるようにして下さい」と要望しているところであります。

### 犯罪主体7に関する詳細説明

テクノロジー犯罪被害に振動被害があります。周囲の振動や体の振動ですが、周囲の振動を巨大化すると地震になります。軍事評論家江畑謙介の著書に、「もし強力な低周波を地面の自然波と同調させて発生させられるなら、局地的な地震を発生させることすら可能である(『殺さない兵器』p106)」と記されておりますことから、それが改良されて個人に悪用できる段階にあることが想像されます。地震大国日本でありますからいつ地震が起きてもおかしくないのですが、人為による地震は別であります。被害者へのピンポイント振動攻撃は人為によるピンポイント地震の可能性を想像させるものであります。2003年1月15日付けプラウダ紙は「2002年夏に欧州とアジアを襲った、予測もつかない自然災害やいくつもの人為的な大惨事が物語るのは、それらを誘発した何らかの原因が地球規模で存在する

に違いないと多くの専門家・科学者は確信している。第一に挙げられるのが、地球物理学兵器の実験が極秘に実施されている可能性である。実験は極秘裏あるいは無許可である。ロシア連邦下院は、HAARP 計画の地球的な脅威の検討に約 1 年を費やした。最終的に、同下院は 2 つの教書を草案した。すなわちプーチン大統領向け、および UN、国際組織、各国の議会、世界の学术界、およびマスメディア向けである。——米国（おそらくは他国も）がすでに、高周波送信設備を建造していることは公然の秘密となっている。そのような装置は、イオンのポンピング（エネルギーの低い状態から高い状態への励起）により、地球環境をプラズマの状態まで加熱することが可能である。環境のコントロールをも可能にするこのプロセスから、大気現象への相当の影響もあり得ると言っても差支えない。このような兵器を所有すれば、地球のどの地域においても洪水や竜巻、嵐、また地震でさえもプログラムできる。また民間や軍の監視システムを麻痺させたり、国民すべての精神に影響を及ぼすことすら可能になる（添付資料 1 2）」と報じております。ロシア下院が審議した地球物理学兵器の脅威は日本にとっても同様であります。昨今異常気象・集中豪雨・巨大竜巻・大型台風・地震・火山の噴火に見舞われている日本ですが、その要因として地球物理学兵器の集中攻撃を受けていることも想定すべきであります。また「国民全ての精神に影響を及ぼすことすら可能になる」との指摘は、国境を越えてのマスマインドコントロールも心配しなければならないということでもあります。地球物理学兵器と同様の兵器かもしれませんが、前出バリー・トゥロー氏は「スーパートランスミッターをもっているなら、それからマイクロ波を三角法の原理で照射するだけでいいのです。もし世界に小麦を供給している国の経済的崩壊をもたらしたいなら、——電離層にビームすればいいのです。定められた角度でビームされたマイクロ波は反射してその国に命中します。そして継続してその大地の小麦にビームし続ければ植物の免疫システムを弱らせることができますので、健康な食物でなくなり枯れるでしょう。またその成長を妨げることもできますので、結果としてその国の経済的崩壊をもたらすことができます。全動物、牛、羊を傷つけることができ、それは本当に簡単で、ボタンを押すだけで一国家を経済的崩壊に導くことができるのです」と証言しております。このような武器の存在も周知のものとするべきであります。これらは正に国家・国民に対するテロ行為そのものであります。

以上のことから、2019年2月23日付、日本弁護士連合会会長宛て『テクノロジー犯罪と嫌がらせ犯罪を撲滅するための要望書（添付資料 1 9）』、要望事項 7 で、「地球物理学兵器、気象変動兵器の存在と使用実態を、日本弁護士連合会所属全弁護士がご理解の上、その技術が特定秘密保護法で守秘義務の対象とされないよう政府を監視し続けて頂きますとともに、その悪用から国民を守るために、法を整備するだけでなく、世界的傾向でもあることから、世界の法律関係者が結束してこれに当たるようにして下さい」と要望しているところでもあります。

## 犯罪主体 8 に関する詳細説明

サイバネティクス技術（人間コントロール技術）の存在をさらに裏付ける資料として米国

陸軍戦争大学 (The US Army War College) の季刊誌『Parameters』に掲載された『心にファイアーウォールはない (添付資料 1 3)』があります。サイバネティクス技術は、人間の脳が電子回路として機能すると捉えた天才的数学者ノーバート・ウィナーが主導したのですが、人間の脳に限らず、心臓、末梢神経系の化学・電氣的活性、大脳皮質部から身体の各部位に送られる信号、聴覚信号を処理する内耳の小さな有毛細胞、視覚的活動を処理する眼球の感光性の網膜と角膜などもコンピューターのデータプロセッサとして機能することが述べられ、今日それに狙いを定め、操作し、弱体化する情報戦争の時代に入っていると主張しております。これは人間のコントロールが技術的に可能であることを前提としているわけで、しかもそれができる兵器をロシアが所有していると述べていることから、人間コントロール兵器が存在することが明らかになりました。これによりテクノロジー犯罪被害者の証言が重要性を増し、実際の発展レベルを知るために不可欠な情報となっているのです。これに前記地球物理学兵器や気象改変兵器も加わって展開されるのが高度情報化時代の戦争であります。この戦争は、一般に知らされていない武器を使い、見えない方法で行なえるのですから、宣戦布告の必要もなく始められるものであります。すでに始まっていることも考えられます。地球物理学兵器や気象改変兵器を使うのですから、かつて「国破れて山河在り」と謳われた時代は終わって、敗れた場合原型を残さないほど惨憺たる状態で終わるのは看えたことであります。日本列島沈没も考えられるところでもあります。沈没せずに生き残っても全く抵抗できない無能力人間にされて生き続けることになるのです。かつてアヘンを使って中枢神経を冒した戦争からサイバネティクス技術で中枢神経を冒す戦争の時代になっているのです。

以上のことから、2019年2月23日付、日本弁護士連合会会長宛て『テクノロジー犯罪と嫌がらせ犯罪を撲滅するための要望書 (添付資料 1 9)』、要望事項 8 で、「高度情報化時代の戦争とそれが結果する絶対専制国家の現実を、日本弁護士連合会所属全弁護士がご理解の上、それに使われる兵器 (技術) が特定秘密保護法で守秘義務の対象とされないよう政府を監視し続けて頂きますとともに、世界が同じ危険に晒されていることから、世界の法律関係者が結束してこれに当たるようにして下さい」と要望しているところでもあります。

### 犯罪主体 9 に関する詳細説明

アンケート調査の結果及び被害者証言から嫌がらせ犯罪に 1 1 の特徴があることが明らかになっております。それは、①集団性、②ストーカー性、③継続・反復性、④タイミング性、⑤監視性、⑥システム性、⑦組織性、⑧ネットワーク性、⑨マニュアル性、⑩歴史性、⑪非常識性であります。そして最後の非常識性ですべての特徴が貫かれていることも分かってまいりました。そしてこの非常識性が重要で、嫌がらせの内容が常識から離れていればいほど一般人はもちろん、警察、弁護士、行政官、政治家、だれもその訴えを聞かなくなります。逆に常識の範疇の嫌がらせでは被害者を助ける人が必ず現れますので犯罪主体に危害が及ぶ恐れがあります。犯罪主体はこの点をよく理解していて、常識の範疇の嫌がらせは絶対にしないという強固な意思をもって行なっていることが分かってまいりました。しかも集

団性をもって行なっているのですから意思統一の場が必要であります。被害者が全国にいるということは全国規模で意思統一の場が必要になります。以上のことから、嫌がらせ犯罪は全国的規模の組織犯罪であることに間違いなく、組織犯罪対策法が適用されるべき新しい組織犯罪であります。

嫌がらせ犯罪における9番目の特徴マニュアル性は注目すべきで、巧みに人を追い込む術に長けていることから、その元がどこにあるか見極めることは重要であります。この面で長けているのは、昔は特高警察、今は公安警察でしょうが、世界的規模で同様の被害が発生していることから、その広がりの説明できるものでなければなりません。これに関して元FBI特別捜査官テッド・ガンダーソン氏がギャング・ストーキング（当NPOで嫌がらせ犯罪と称するもの）の行為・グループ・集団について、「1980年代前半から実施されている隠密のプログラムを合理的に説明するものであると考えます。1980年代以降、ギャング・ストーキング行為は新たな通信・監視技術を利用し、その規模や激しさ、複雑さを増してきました。当該プログラムではエシュロン・プログラム、カーニボア・システム、およびテンペスト・システムというコードネームを用いています。エシュロン・プログラムはメリーランド州フォートミードの国家安全保障局の管理下にあり、世界中の全ての電子メールや電話の通話を監視しています。カーニボア・システムはメリーランド州フォートミードの国家安全保障局の管理下にあり、痕跡を残すなど所有者に知られることなく、あらゆるコンピュータシステムをダウンロードすることが可能です。テンペスト・システムは最大で4分の1マイル離れたところにあるコンピュータ画面上にあるものを解読することができます。これらのプログラムは何千人ものアメリカ国民にマイナスの影響を及ぼし、彼らの市民権を日常的に著しく侵害しています（添付資料14）」と主張してその犯罪の存在を認めております。そしてそれを行っている犯罪主体について政府系悪徳犯罪集団という名称を使って、「私自身の職業的経験、広範囲にわたる情報資料および信念に基づき、専門家の立場から、FBIが関与しており」また「FBIその他情報機関、政府機関全般の幹部の他、犯罪組織の裕福かつ有力な構成員、億万長者や企業エリートらが、政府系ギャング・ストーキングプログラムを利用して、敵対者を攻撃しています」と主張しているのです。しかもその証拠も、「ギャング・ストーキングの事実は、FBIと国家安全保障局の両方で、エシュロン・プログラム、カーニボア・システム、およびテンペスト・システムに関する記録に記載されています。また、ギャング・ストーキングの事実はFBIと国家安全保障局の両方で、ナルス社のシステムにより収集された情報に関する記録に記載されています。ナルス社は防衛請負業者であるボーイング社の完全子会社であり、ボーイング社はFBIおよび国家安全保障局が現在使用している高度な大量監視コンピュータシステムを製造している会社です」と述べてその所在を明らかにしております。そしてこれを主張する情報源は、「FBI、中央情報局（CIA）、国家安全保障局、軍情報部等の現役メンバーや元メンバー、犯罪集団内で活動中の情報提供者、被害者の証言」から得ていると述べているのですから氏の証言の信憑性は絶大であります。敗戦国日本はこの影響を受けている可能性が大いにあり、嫌がらせ犯罪のマニュアルを提供していると考えられます。

以上のことから嫌がらせ犯罪がこれまでの組織犯罪とは次元を異にするものであることはご理解いただけたと思いますが、元公安調査庁調査第二部長菅沼光弘氏が「日本の闇社会（添付資料15）」で述べているように、日本の暴力団の実力も相当なもので、はたしてそれほどの実力者がその右に出る犯罪組織の存在を許すのかという疑問も湧いてまいります。その右に出る存在があるとしたら、国家権力を背景とした、テッド・ガンダーソン氏証言にある、政府系悪徳犯罪集団ということでしたら納得できるものがあります。

テクノロジー犯罪と嫌がらせ犯罪は民主的政治プロセスに影響を及ぼしております。政治を目指す人間に仕掛けていることは私自身地方議員を経験しておりますので身をもって経験していることであります。次から次へと終わりなく繰り返される嫌がらせ犯罪とテクノロジー犯罪の集中攻撃であります。これによってこれまでも志を遂げられずに果てていった方が相当数いらっしゃったものと思います。日本に生まれ、日本のために働こうと思って立候補を決意したにも拘わらず、このような攻撃に遭うのですから、日本人にあらざる輩が権力を掌握していると思わざるを得なくなります。さらによろやく地方議員になってもそこに暴力団が忍び寄ってまいります。上手に問題を発生させてどのように動いてくるか見るという手法が採られております。その解決に暴力団に手を打ってもらおうとすればそれなりの代償を払わなければなりません。暴力団がその対応をみて、今後もたかれると烙印を押したら、次期選挙は当選確実であります。さらにたかれると思ったら、次は市長、国会議員で、山ほど代償を払い続けることになるのです。その代償は市民・国民の税金で充てられます。議員を辞めても死ぬまでたかられていた人もいるほどであります。このようにして政治家と暴力団は密接な関係にあることがよく分かってまいりました。これと似たことをしているのが新興宗教団体であります。信者の票を利用して、選挙に協力し、当選後はたかり続けるわけがあります。警視庁に6000名の信者を送り込むというたかり方までしております。前任者や現職がこの両者に頼っていればいるほど後任者や新人は両者と闘わなければならなくなります。両組織は各地に存在しておりますのでその影響は甚大であります。暴力団の構成員に付いて菅沼光弘氏は「同和60%、在日30%、中国系と同和でない日本人10%」と前記講演で述べております。暴力団が政治家と密接になって、選挙に絡み、その要領を学んでいるのですから、それが長期に及んだ結果として、政治家の構成が暴力団の構成と同じになってもおかしくありません。またその背後で新興宗教団体100%になってもおかしくないのです。このような構図がテクノロジー・嫌がらせ両犯罪の解決を難しくしていることは間違いないと考えます。また私の選挙で投票も含めて協力してくれた方が次々にお亡くなりになっていることから分かってきたことがあります。死因は、心臓発作、風呂場での突然死、癌等々で、バリー・トゥロー氏がマイクロ波兵器で誘発できると証言しているものであります。地元暴力団は不思議と誰が誰に票を入れたのかまで把握しております。その暴力団がテクノロジー犯罪主体と密接に絡みマイクロ波兵器を使ってそれを行っていることが考えられます。私に起こっていることは全国的に同じ状況と考えられます。同和を筆頭構成員とする暴力団と新興宗教団体がテクノロジー・嫌がらせ両犯罪主体と一体となっ

て日本の選挙を演出しているのです。ここに両犯罪を公にできない大きな理由があると考えます。この構図こそ戦後レジームそのもので、その解体を本当に望むなら、この構図こそ解体すべきであります。

以上のことから、2019年2月23日付、日本弁護士連合会会長宛『テクノロジー犯罪と嫌がらせ犯罪を撲滅するための要望書（添付資料19）』、要望事項9で、「嫌がらせ犯罪（組織的・継続的嫌がらせ行為）の実態、それが民主的政治プロセスに影響を及ぼしていること、政権掌握に利用できること、ひいては傀儡政権作りに利用されている実態を、日本弁護士連合会所属全弁護士がご理解の上、それから国民を守るために、法を整備するだけでなく、世界的傾向でもあることから、世界の法律関係者が結束してこれに当たるようにして下さい」と要望しているところであります。

### 犯罪主体10に関する詳細説明

前記11の特徴をもつ嫌がらせ犯罪を畳みかけられることによって、被害者はパニックに陥り、誰に話しても理解されないことによる孤立、また親しい人に同様の危害が及ぶことを心配して自ら交友を断つことによるさらなる孤立に陥るのが通常であります。これにテクノロジー犯罪も仕掛けてダメージを倍加させる手法が採られているのです。その先にあるのは自殺か、パニックに陥って精神病院への収容か、止むにやまれず緊急避難的に誤った対処をしてしまうかであります。そしてこれが犯罪主体の描く構図であることを看破してまいりました。この構図を理解して現代の世相をみますと、毎年2万人を越える自殺者、169万人ともいわれる精神疾患患者の増加（平成26年度厚生労働省調べ—うつ・統合失調症のみ—）、信じ難い凶悪犯罪の増加があり、犯罪主体が描く構図と合致していることが分かります。そのためこの世相は両犯罪主体が演出していると考えることができます。

当NPO確認被害者2226名中すでに34名がお亡くなりになり、うち約半数が自殺であります。警察庁が発表した「平成29年中における自殺の状況・付録」をみますと、自殺要因のトップはうつ病で、全体の2割弱、4278人となっております。統合失調症要因の自殺者は1065人、その他の精神疾患が1306人ですから、合わせると6649人が精神疾患要因で自殺したことになります。前出バリー・トゥロー氏証言にありましたように、マイクロ波で精神疾患を誘発できるのですから、そのなかにはテクノロジー犯罪が原因でやむなく自殺された方がかなりの数含まれていると考えます。精神疾患患者数は厚生労働省発表で平成26年度に390万人を超えております。この15年で150万人以上増える上昇ぶりであります。テクノロジー・嫌がらせ両犯罪を経験した多くの被害者が精神的不安を掻き立てられたと証言しておりますことから390万人の精神疾患患者の中には両犯罪を知らずに病気と思い込んでいる方が多々いらっしゃるものと考えます。自殺者・精神疾患患者数の増加は現代の社会問題となっておりますので両問題を解決するためにもテクノロジー・嫌がらせ両犯罪に取り組まなければならなくなっているのです。

テクノロジー犯罪にマインド・コントロール（洗脳）という言葉がよく使われています。遠隔から特定個人を操るもので非常識極まりない犯罪であります。人間の思考への介入および音声送信あるいはイメージの送信でそれができると考えます。この技術の存在を知らなければ犯罪主体の思いのままに動かされてしまうことは多くの被害者が証言しているところでもあります。それが犯罪に発展してしまった悪い例として、2013年9月16日、アメリカはワシントンD. C. の海軍工廠で発生した発砲事件があります。容疑者のアロン・アレクシスは犯行前に音声送信被害や振動による睡眠妨害を訴えていたことが報道されております。アレクシスはその現象を米国の被害者団体 FFCHS の代表デリック・ロビンソン氏に相談しておりました。そのため犯行後に氏からマスコミ各社に資料が送られ、ワシントンタイムズ紙が報道しました。このような事件は日本でも発生しております。2008年3月19日横須賀市でタクシー運転手殺害事件が発生しました。容疑者の若いアメリカ兵は音声送信被害を裁判で証言していますのでテクノロジー犯罪が起因する事件と考えられます。2013年3月19日には地下鉄東陽町駅付近で傷害事件が発生しました。この容疑者も「お腹の中から超音波で人を刺してみろよ」という声が聞こえたと言っていることからテクノロジー犯罪被害者による犯行と考えられます。2011年2月7日には習志野市で母親殺害事件が発生しました。この容疑者は犯行の2年ほど前に当NPOにアンケートを提出していたことからテクノロジー犯罪被害者であることに間違いありません。このような事件はテクノロジー・嫌がらせ両犯罪を放置しますと増加の一途と考えます。本当の主犯はテクノロジー・嫌がらせ両犯罪主体であります。そのため新しい意味での冤罪が発生しているのです。

バーチャル・リアリティー技術を悪用したと思われる被害も発生しております。それは実際にそのような拷問を受けていないにもかかわらず、頬を針金で貫かれた感覚挿入や神経を編まれている感覚挿入を経験した被害者がおります。これは実際にその拷問を受けた人の脳波を記録してそれを被害者に送信することによる仮想拷問感と考えられます。また本人にしか見えないバーチャル・ホログラフィー的キャラクターが現れて絶えずストーカーしてくるという訴えもあります。そのキャラクターは電車に乗っても付いてきて隣に座って肘で突いてくるという訴えであります。さらには当NPOが任意団体として発足した当初からヘリコプターによるつきまといを多くの被害者が訴えておりました。最近になって、操縦士の顔まではっきり見え、その男が笑っている表情も分かるほど接近してホバーリングしていたが、当然あるはずの風圧がなかったという証言を得ることができました。それほど接近して風圧がないということは考えられないことでもあります。このことから壮大なバーチャル・ホログラフィー攻撃ができることを確信した次第であります。

1997年12月16日発生したポケモン事件について、米国陸軍情報保安局が公開した『特定の非殺傷兵器の生体効果（添付資料16）』で、それに言及しております。それによりますと「電磁パルスの概念は、非常に高速（ナノ秒単位）高圧（約100 kVm 以上）の電磁パルスが、アルファ脳波周波数（約15 Hz）で反復するというものである。これに似た周波数のパルス光は、感受性の高い人々（一定レベルの光過敏性てんかん患者）を刺激し、



発作を起こさせることが知られており、実際に電界で神経シナプスを直接起動させられる方法を使うと、ほぼ100%の人々が発作を起こしやすくなると考えられる。光誘発性の発作現象は、1997年12月16日の日本のテレビ番組で実証された。人気の高いアニメを見ていた数100人が軽率にも光による誘発発作として治療されたのである。光誘発発作は、最初に目が脳の視神経に関連する部分を起動する衝撃を受け止め、伝達しなければならないため、二次的な現象である。その段階から、興奮性は脳の別の部分に広がる。電磁的な概念によれば、励起は直接脳で起こり、すべての領域が同時に励起する。筋肉制御の同期と停止は、ほんの一瞬で発症すると予測されている。回復時間は、てんかん発作で観察された時間と同じか、短くなると予測されている」とあり、15Hzが光過敏性発作を引き起こす周波数と記されております。電磁波にはこのような非熱効果があるのですから、それが故意に悪用されて、ポケモン事件以上に多くの人々が光過敏性発作に見舞われる恐れがあります。そのようなことにならないように法整備を含めて万全な対策が採られる必要があります。

テクノロジー犯罪によって、生理的統合が失われるだけでなく、運動機能・感情、三欲、そして精神的な統合と、あらゆる面で統合を失わせるのがテクノロジー犯罪であります。統合失調症とはよくつけた名前です。当を得ていると被害者の立場から感心している次第であります。これは完全なる個人破壊につながります。これに非常識に徹する嫌がらせ犯罪が伴うのですから破壊力は倍加されます。この個人破壊は、それに対する理解者が今のところ得られないことから、家庭においては家族破壊につながります。さらには犯罪主体として近隣住民を疑っている被害者が多いことから、近隣トラブルの発生が考えられ、それは事件に発展する恐れがあります。これは社会破壊につながるものであります。テクノロジー犯罪を全国民に実行すれば国家破壊となります。このようにテクノロジー・嫌がらせ両犯罪の根底には破壊工作がプログラムされていると考えます。

テクノロジー犯罪には、遠距離から、見えない方法で、空間に放出された異物を標的に命中させるテクノロジーが使われております。卑近な例で申し訳ありませんが、1995年9月5日東名高速道路走行中にこの攻撃を経験しております。3車線の中央車線を走っていると、前方左車線を走行していた4トンほどのトラックの荷台の下から直径5センチほど長さ20センチほどの異物が落されました。円柱状の異物ですからボールのように規則性をもって弾むことはないはずですが、1回2回と規則的に弾み、3回目だったと思いましたが私の車のボンネットをかすり顔面直撃と思われた瞬間に上に飛んで行った経験であります。これには異物を落とす仕掛け人とそれを操作する人間、操作するには人工衛星とスーパーコンピュータの力を借りなければできない仕事と思われまことから、犯罪主体は相当絞られると思われまこと。これによって自動車事故を演出することができます。2000年にコンコルド機離陸失敗による墜落事故が発生した時にも、異物が当たったというニュースを聞いて、これもそれによるものと判断して、当時の森総理大臣に注意を喚起した次第であります。テクノロジー犯罪主体はこのように現実離れした方法で事故を演出している可能性があります。

テクノロジー・嫌がらせ両犯罪による社会の低俗化も著しいものがあります。被害者の動向を思考レベルで読み、行く先々に指示を出して嫌がらせ行為を行なう組織網・連絡網は長期にわたって作り上げられてきたものであります。社会生活を営む上で必要不可欠なあらゆる場所、銀行・郵便局・スーパーマーケット・コンビニ・飲食店・病院・ホテル・役所・学校・趣味の場・宅配業者等々、どこに行っても不審な対応をさせることができる態勢が整えられております。嫌がらせネットワークはそれを維持するために誰かをターゲットにして継続しなければ成り立たなくなるものであります。監視技術が、嫌がらせ実行部隊も監視して、実際行なっているか確認し、行なわない場合、その者にも攻撃を仕掛けるまでして犯罪組織網を維持していることが考えられます。その範囲が広範囲におよぶため社会の低俗化は避けられないものとなります。そしてこの低俗化も計画されたものであります。テクノロジー・嫌がらせ両犯罪主体にとって生き易い社会の低俗化をこれ以上進行させないために長期にわたって構築されてきた嫌がらせ犯罪組織網を打ち破る必要があります。この組織網構築には防犯が建前として使われている可能性があります。テロ対策という建前が使われている可能性もあります。2020年東京オリンピックを間近にしてその組織網の強化が心配される場所でもあります。日本の治安対策を司る部署が政府系悪徳犯罪集団にリクルートされている可能性も考慮すべきで、防犯・テロ・治安を名目にした政府系悪徳犯罪集団の魔の手に国民が縛られることにならないよう万全の対策を要望致します。

そのために大事なのが警察機構であります。テクノロジー・嫌がらせ両犯罪被害者が一番頼りにしているのが警察であります。ところが助けを求めに警察に行っても、門前払いされた、話を聞いてもらえなかった、話を聞いてもなにも書き取ってもらえなかった、一笑された、精神病扱いされたという報告がほとんどであります。なかには来ることを見透かしていたかのように不審な対応をされたという報告もあります。このことから警察に不信感を抱いている被害者はたくさんおります。当NPOとして活動する場合もこれは同じであります。特に警視庁の対応は悪く、相談しようとしてもアポイントが取れず、仕方なく出向くと、入口の警備のところから入れてもらえず、やむなく110番通報して入れてもらったことがあるほどであります。会発足当初はアポイントがなくても相談できましたので悪化の一途であります。これには理由があるはずであります。私どもの行動を監視して警備担当に指示している部署があるように思えてなりません。そのことから警視庁内に政府系悪徳犯罪集団の組織化が成されていることも考慮されるべきであります。ある新興宗教団体は6000名の会員を警視庁に送り込んでいるという情報も入っております。またある警視庁OBは内部昇格試験において特定の人に答えを教えていると証言しておりました。どのような人がその恩恵にあずかっているのか調べれば実態がよく分かってくると思います。警察組織は上意下達傾向が顕著な組織ですから下の者はおかしな指示でも従わざるを得ない立場にあります。しかし著しく不審な指示をそのままにしておくことは組織を腐らせる要因となります。そこで警察組織の健全化を図るためにも、全警察官を対象として、不審な指示を経験していないか、ある場合どのような指示であったかを問うアンケート調査を実施するよう警察庁長官に要望しております。これによって警察が健全化されればされるほど被害者にいい意味で影響し

てくることとなります。さらに警察庁長官に宛てた2014年6月26日付要望書で、「テクノロジー・嫌がらせ両犯罪について最も身近な全警察官を対象としたアンケート調査を実施して下さい。それには要望事項1を確実に実施してよく理解した上で実施して下さい。アンケートでは、①両犯罪被害を経験していないか、②経験している場合どのような被害で加害者をどのように考えているか、③加害者側に加担せざるを得ないよう圧力を掛けられたことはないか、ありの場合は誰からどのような行為を強いられたのか、④被害者が警察署に相談に来る前にその知らせが何者かによってもたらされていないか、もたらされている場合その情報提供者は何者か、⑤前記情報を知らせるだけでなく、被害者に対しておかしな対応をするようにとの指示はなかったか、ありの場合その対応とは、⑥被害者の相談内容を漏らすよう要求がなかったか、ありの場合その要求者は何者か、等を問うアンケート調査であります。その結果と当NPOのアンケート集計結果とを比較すれば当NPOの訴えを別の面から裏付けることとなります。また全警察官の意識状況を新しい面から認識できるようになります。これを人事に大いに利用して下さい」と記しました。

尚、前出元FBI特別捜査官テッド・ガンダーソン氏の「FBI その他の情報機関や政府機関全般で働いているほとんどの個人は正直であり、法を順守する公僕であると固く信じています。しかしながら、悪徳工作員のネットワークはFBI、CIAなどの情報機関、その他重要な官職に秘密裏に潜入しています。この悪玉は個人的な権力や富を追い求めており、自分たち自身を法や憲法より上の存在だと考えています。彼らは、組織犯罪、悪魔崇拝カルトなどアメリカ国内のカルト運動、その他商業的・政治的権益、誤り導かれた市民組織や近隣集団と共に前述の監視や嫌がらせを実行します」との証言は重要であります。圧倒的多数の職員が真面目でもトップが腐ればそれに従わざるを得なくなります。このような腐敗は米国だけでなく、日本でも、また世界でも同じと考えます。この治安機関の腐敗化、腐敗しての連携が心配されますので、世界が一になってその改善に取り組む必要があります。その方向で日本弁護士連合会がリーダーシップを発揮して頂きますよう要望致します。

治安機関の腐敗について、当NPO代表石橋輝勝個人に宛てられた告発文と思われる手紙に、オウム真理教地下鉄サリン事件や国松元警察庁長官狙撃事件に関わることが書かれておりました（添付資料17）。そこで指摘されている人物の名前と2020年東京オリンピックセキュリティー関係者とが同一？と思われたことから、これを止めておいて万が一のことが起こった場合のことを考えて、本年2月警察庁長官宛てに要望書に添付して調査をお願いしているところであります（添付資料18-p14-要望事項19）。これは日本における政府系悪徳犯罪集団の存在にも迫れる可能性もありますので是非ともその結果を日本弁護士連合会として確認して明らかにして頂きますよう要望致します。テッド・ガンダーソン氏は、「米国中で年中無休で活動している指令本部が米国内に存在し、その出張所も複数あること、その管理者たちは国内の誰に対しても即座に監視や電話の盗聴、嫌がらせを開始できることがわかっており、その証拠書類もあります。彼らには、違法な監視や嫌がらせを、昼夜を問わずいつでも、誰にでも行える技術、資金、人的資源があります。私は、現在何千人ものア

メリカ人に対して実行されている計画的かつ違法な政府による嫌がらせについて、数多くの事例が記載されたファイルを持っています。これに比べれば、私が以前監督者の立場も含めて携わっていたFBIの対敵諜報活動プログラムなど、教会の日曜学校のプログラムのようなものです（添付資料14）」と述べており、その日本本部に迫れる可能性もありますので徹底した調査を要望致します。

以上のことから、2019年2月23日付、日本弁護士連合会会長宛て『テクノロジー犯罪と嫌がらせ犯罪を撲滅するための要望書（添付資料19）』、要望事項10で、「テクノロジー犯罪と嫌がらせ犯罪を用いて、凶悪犯罪・事件の増加、ストーカー被害者の増加、自殺者の増加、精神疾患患者の増加、家族崩壊、社会破壊、社会の低俗化、警察の悪質化など、世相を演出している実態を、日本弁護士連合会所属全弁護士がご理解の上、それから国民を守るために、法を整備するだけでなく、世界的傾向でもあることから、世界の法律関係者が結束してこれに当たるようにして下さい」と要望しているところであります。

#### 4. テクノロジー・嫌がらせ両犯罪主体への要望

##### 犯罪主体1に対する要望

無辜の一般市民に対して、また国民全体に対して、さらには各国国民に対して、レーダー、人工衛星、スーパーコンピュータ、AI技術等を使って、終日の追跡と監視行為を止めよ！

##### 犯罪主体2に対する要望

無辜の一般市民に対して、また国民全体に対して、さらには各国国民に対して、思考を含めて人間のあらゆる機能を遠隔からコントロールするサイバネティクス技術の悪用を止めよ！

##### 犯罪主体3に対する要望

無辜の一般市民に対して、また国民全体に対して、さらには各国国民に対して、神経学的通信システム（音声・映像送信）の悪用を止めよ！

##### 犯罪主体4に対する要望

無辜の一般市民に対して、また国民全体に対して、さらには各国国民に対して、監視技術（サバイランス・テクノロジー）、マイクロ波兵器、サイバネティクス技術等を用いての、拷問、疾病誘発、殺害を止めよ！

##### 犯罪主体5に対する要望

無辜の一般市民に対して、また国民全体に対して、さらには各国国民に対して、インフォームドコンセントのないブレインチップ等各種インプラントや、インフォームドコンセント

のないあらゆる人体実験を止めよ！

\*新型コロナウイルス感染予防対策として開発されているワクチンへのブレインチップの混入を止めよ！

#### 犯罪主体6に対する要望

無辜の一般市民に対して、また国民全体に対して、さらには各国国民に対して、テクノロジー犯罪と嫌がらせ犯罪を用いて国民を出生から死まで監視し管理することを止めよ！

#### 犯罪主体7の対する要望

無辜の一般市民に対して、また国民全体に対して、さらには各国国民に対して（どの国に対しても）、地球物理学兵器や気象変動兵器の悪用を止めよ！

#### 犯罪主体8の対する要望

無辜の一般市民に対して、また国民全体に対して、さらには各国国民に対して（どの国に対しても）、高度情化時代の戦争の対象とすることを止めよ！

#### 犯罪主体9に対する要望

無辜の一般市民に対して、また国民全体に対して、さらには各国国民に対して、嫌がらせ犯罪を行なうことを止めよ！また、嫌がらせ犯罪を用いて、民主的政治プロセスに影響を及ぼすこと、政権掌握に利用すること、傀儡政権作りに利用すること等、政治に関与することを止めよ！

#### 犯罪主体10に対する要望

無辜の一般市民に対して、また国民全体に対して、さらには各国国民に対して、テクノロジー・嫌がらせ両犯罪を用いて、自殺者の増加、精神疾患患者の増加、凶悪犯罪の増加等、世相を演出することを止めよ！

#### 添付資料

1. 『確認被害者2226名居住県表・確認被害者1850名アンケート集計結果』 1部
2. 『国連人権委員会拷問問題等報告者ニルス・メルツァー氏心理的拷問報告』 1部
3. 『マイクロ波によるマインドコントロール』 1部
4. 『秘密情報機関による秘密偵察と電磁波による拷問』 1部
5. 『マイクロチップインプラント、マインドコントロール、サイバネティクス』 1部
6. 『神経科学の進展と人権への脅威』 1枚
7. 『束縛：肉体から精神、心、神経生物学的領域へ』 1部
8. 『マイクロウェーブ技術の危険性』 1部
9. 『変調された電磁波エネルギーに対する人間聴覚システムの反応』 1部
10. 『アメリカ大使館員の体調不良の原因はマイクロ波攻撃が最も疑わしい』 1部

1 1.	『故ラウニ・キルデ博士発言集』	1 部
1 2.	『新しい地球物理学兵器の利用が地球規模の大惨事に』	1 枚
1 3.	『心にファイアーウォールはない』	1 部
1 4.	『元 F B I 特別捜査官テッド・ガンダーソン氏証言』	1 部
1 5.	『元公安調査庁調査第二部長菅沼光弘氏講演「日本の闇社会」』	1 部
1 6.	『特定の非殺傷兵器の生体効果』	1 部
1 7.	『オウム真理教地下鉄サリン事件・国松元警察庁長官狙撃事件に関わる手紙』	1 部
1 8.	『2020年2月22日付警察庁長官宛て要望書』	1 部
1 9.	『2019年2月23日付日本弁護士連合会会長宛て要望書』	1 部
2 0.	チラシ	1 枚
2 1.	パンフレット	1 部
2 2.	会員記載人権救済の申立て	5 7 名分
2 3.	『テクノロジー犯罪被害者による被害報告集』第一巻	1 冊
2 4.	『テクノロジー犯罪被害者による被害報告集』第二巻	1 冊
2 5.	『早すぎる？おはなし』内山治樹著	1 冊
2 6.	『武器としての電波の悪用を糾弾する！』石橋輝勝著	1 冊

\*当NPOホームページもご参照下さい。第12回テクノロジー犯罪被害フォーラムも同サイトからご覧いただけます。

URL <https://www.tekuhan.org/>

以上

\*上記添付資料22：会員記載人権救済申立て57名氏名  
個人情報のため削除して送信